

その位にあらずともその事を行ひ、自家の米塩を憂えずして国家の経綸に志す者は浪人なり。則ち浪人は政府または人民より頼まるるに非ずして、自ら好んで天下のことに当たる。

団結  
同志会  
李作

昭和39年11月の自民  
党総選挙で政権交代に  
佐藤作任黨から同志  
会の時と緊要を感して  
賞格された陣営である

# 自由民主党同志会新聞

発行所  
自由民主党同志会  
主幹 福田晃文  
〒100-0014 東京都千代田区本町1-11-28  
電話 63(522)1735 FAX 93(358)5309  
毎月末日発行 送料別(19年 12,000円)  
編集者 藤井昭博 発行所 青森印刷111786

## 福田自由民主党同志会会長が 民主党政権の「まやかし」を 喝破!!



一体、あのマニフェストは何だったのか。これは多くの国民の、民主党政権に対する思いではないだろうか。選挙前、自由民主党同志会・福田晃文会長が指摘していた危機が現実になったのだが、民主党政権で、今後「日本丸」はどこに行くのか。

あつと驚くべき380億  
円―鳩山首相が初めて  
編成する10年度予算での  
各府庁の概算要求額だ。  
これを受けて、藤井昭  
久財務局長は「新固定定  
する10月16日」と強  
断したが、現実にはさら  
に膨らむという一般的な  
的だ。  
というの、これに事  
項要求が加わるからだ。  
財務要求とは、首庁から  
事務要求への概算要求で金  
額を示さず、項目だけ  
をのせたもの。  
「厚労省だけで11項目  
あります。全府庁を合わ  
せると、金額で2兆円を  
下らないと試算されて、  
実質9兆を越すでしょ  
う。」  
いやは大変な数字に  
膨れ上がる様相である。  
しかもである。09年度  
の収収は、見積りより  
も6兆円少ない、40兆円  
以下に落ち込むと予想さ  
れているのだ。  
選挙前の民主党政権部  
の言葉を思い出していた  
きた。  
「財源など政権を取れ  
ばどうにでもなる」と小  
沢幹事長「ムダを削れ  
ば2兆、3兆は簡単にし  
てくる(一藤井財務相)

一体、こうした言葉はど  
こに行っただのか。  
その上、鳩山首相は  
「国債はそれ以上発行し  
ない」と明言していた  
てきたのか。収収が減  
るなかで、国債発行を抑  
え、民主党政権がマニ  
フェストを其の通りに  
は、まさにマニフェスト  
この現実を踏まえ、自  
由民主党同志会・福田晃  
文会長はこう喝破した。  
「選挙前から我々は民  
主党のマニフェストを  
実現するのは不可能だ、  
と言いつつ、財源が不足  
し、財源が不足する  
いっしょに、財源がな  
いわけですか。  
それで私は民主党政権は  
「不渡り手形」を乱発し  
ている、と指摘してきた  
のですが、政権を取  
れば、私が現実にならな  
いわけですか。  
民主党政権は国債を受け  
ばかりをマニフェストに  
掲げれば、いかに国民を愚  
弄しているのか、このま  
また、我が国は未曾有の  
借金大国になり、破た  
んの途へと一直線です」  
民主党政権のマニフェスト  
に対する財政の不足問題は  
は、福田会長が苦言を  
述べたのか言う。民主  
党の不渡り手形の乱発  
―この文脈で捕えれば  
―は、神楽の青天開飛行  
場の名護市辺野古の移  
転問題も同様だ。民主  
党は「限外・国債への移  
転」を掲げていた。  
「限外にして国債にし  
ろ。民主党政権にはその  
先があったわけではない。  
先の問題と一緒です。  
結果的に辺野古への  
の移転以外の選択は提  
示できないわけだ。  
これは神楽市民を愚弄  
している、と言わざるを  
得ないのですが、この問  
題は同盟国であるメリ  
国と約束です。つまり  
対外的約束なので、こ  
れが民主党政権の一体  
どころですか。  
もりのなか(福田文  
話、膨れ上がった概  
算要求に促す)と民主政  
権後これに削り込み。当  
初予算を92兆円以下に  
収めたい(藤井由人行  
政刷新相)10月18日、  
政権が、初めて90兆  
の大枠に乗ることは間違  
いない。

福田会長の民主党政権  
に対する鋭い舌鋒は純  
く、  
「結局借金(赤字国債)  
しかないでしょう。次世  
代に大量の借金を残す  
だけです。自分たち(民主  
党)が、世にわたる  
の次の世代に押しつけ  
る。民主・鳩山首相が  
言う「友愛」、自分は  
の仲間同士の愛―金持  
ち主義といえますか。金  
持ちサカルの」の間で  
もの、ひびがえって、自  
由民主党が唱える「博愛  
は、すべての国民にと  
いうことだ。だからこ  
ろ長きにわたり自民政権  
が続いたわけだ。  
誤解を恐れずに言え  
ば、いま国民の、いわば  
の民度の低下が著しい。  
そこで強調したいのは  
「国民自派を覚ませ」と  
いうことです。」  
崩壊の民度の低下  
このため福田・自由民主  
党同志会は、若者や主婦  
を中心に、政治の勉強会  
を日常的に開いている。  
ともあれ、日本経済の  
を増やし続ける民主政  
権では、いずれ、日本丸  
は沈没する。」

### 特定非営利活動法人 健康開発事業団



健康は国力の源泉にして雇用創生は国の原動力  
病気にしない・病人にさせない・患者にならない  
昭和38年(1963年)三ない運動を提唱して45周年

東京都千代田区永田町1-11-28  
FREE FAX 0120-715-745



# 全国鉄骨評価機構 (全鉄評)

## に渦巻く黒い審査

### 舞台はタイ国

#### 裏で暗躍する1人の国辱的日本人が浮上!!

株全国鉄骨評価機構（東京都中央区日本橋 橋本順次社長）という会社がある。鉄骨製作工場の性能評価を行う会社で、国交省の指定性能評価機関だ。審査となれば、極めて高いレベルの「中立性」「公平性」が求められるのだが、取材を進めていくと、同社の“ゆがんだ”審査の実態が浮き彫りにされてきた――。

全国鉄骨評価機構という会社をご存じだろうか。一般にはあまりなじみが薄いですが、鉄骨工業界にとっては、畏怖すべき存在なのである。それどころか、極めて「役所的な会社」で、それは同社の生い立ちを振り返れば納得できる。

すなわち、その前身は「社団法人 全国国交省連合会」で、現在の国交省が認可した社団法人だ。これが平成12年には社団法人 全国国鉄骨工業協会と名称を変更し、その後、平成20年に鉄骨製作工場の性能評価部門が分離、独立して設立されたのが、この株全国鉄骨評価機構（以下、全鉄評）なのである。

こうした経緯を経て同社は性能評価機関として、国土交通大臣の指定を受けた（わが国ではほかには1社しか存在しない）会社で、いまだに官製的色彩を色濃く残している。

いずれにしても、同社は鉄骨製作工場の性能評価――いわばJIS工場審査の鉄工場版――を行う会社で、鉄骨製作工場の生殺与奪を握っているだけで、業界にとっては一歩も引かざるべき存在、と前述したゆえんだ。

その性能評価審査（以下、審査）においては「中立性」「公平性」が求められるのは当然で、高いレベルのコンプライアンスの遵守が必要だ。それは、同社の橋本順次社長も、

「信頼の鉄骨」をモットーに審査の更なる向上を図ってまいります（同社のトビックスより）

と、信頼を高く掲げている。

審査において、前述した「中立性」「公平性」があればこそ、信頼が醸成されるというものが、同社の審査の過程で、その「信頼」を揺るがす耳を疑うような話が飛び込んできた。

それを述べる前に、審査を行うのだから、その道の「プロ」といえるべき評価委員がいなければならない。当然、同社には元国立大学の教授など、そうそうたる人物を揃えている。

さて核心に入る。

「タイ国のゼネコ数社が、HJグレード（評価の区分のひとつ）の性能評価審査を、全鉄評に申請しました。その過程、極めて、おかしなことが多々散見された（この問題の詳しいA氏は、以下、よく重い口を開いたという格好のA氏、業界へのさまざまな波紋を

案じてか、当初は余り多くは語らなかったが、”、”、”のおかしなことについては、次号の詳しレポートするので、ここでは極めて簡単に述べる。

舞台は発展著しいタイ国。そのタイ国内のゼネコンがHJグレードの審査を全鉄評に申請した。なお、当初の評価審査は、他全国国鉄骨工業連合会が、その後は株全鉄評が行った。その結果、A社は合格、B社は不合格。こうしたケースが出てくるのは当然といえば当然である。

だが、その裏で、不公平――不中立性――があった。――海外勤務の社員が、所属する企業が雇われて、現地ではビジネスを展開するところ、今では決して稀有なことではない。

なかには「プロカー」に变身する人物も少なくない。現地の言語が通じ、これまで築き上げた人脈、さらには現地企業や輸出した日本企業、顔が利かるとなると、もうした道を選択しても不思議ではない。とりわけ、タイ国のような、生戦期にある新興国では、その活躍の舞台は拡がる。

全鉄評の「正んだ」性能評価審査問題に関し、一見関係のないことを、こう長々と記したのは、取材を進めていくと、この問題の背後で暗躍するタイ国在住の1人の日本人「プロカー」が浮上したからだ。

すなわち、この問題を追っていき、この日本人に行き着いたのである。

仮にH氏としておくと、このH氏が審査を受けるタイ国の企業の代理人（トビックス）となり、おかしなことを繰り返しているのである。つまり、この人物の「活躍」が全鉄評の評価委員の「恣意的」な判断へと導くという構図だ。

と同時に、このH氏は我が国の信頼を失墜させるという、国辱的な動きをしているのだ。H氏のことをしている行動は、H氏は日本とタイ国の交友関係にひびきを入れるというものである。

前述したように詳細は次号に譲るが、これが本当ならば、まったく不公平であり、先の全鉄評・橋本社長の言葉がむなしく響く。

なお、この問題は我が国を代表する大企業（本社・大東建中央）のタイ支店トップが、H氏の「相棒」として登場することを付記しておく。以下次号

